

看護を实践することと、看護を思索することと

広島大学医学部保健学科

野島良子

I 看護学のパラダイムの成立と転換

去る7月9日の朝、私はThomas S. Kuhnの死去を報じる新聞のニュース（1996年7月9日の朝日新聞）にある種の衝撃を受けながら出勤して参りました。ひとりの物理学者であり科学哲学者でもある人の死去のニュースが看護婦である私の注意を引き、感慨を覚えさせた理由は、彼が創案した“Paradigm”という言葉の中にあります。この50年の間に現代看護学が積み上げてきた仕事とそれらの仕事の意義を振り返って、21世紀に看護学がなすべき仕事の方向を展望するうえで最も重要な鍵を握っている言葉の一つが“Paradigm”であるからです。

Florence Nightingaleの『看護覚え書き』に始まる近代看護は、すでに140年余の歴史を地球上のあらゆる地域において人々の生活の中に刻んできていますが、一つの知識体系としての看護学という観点からみると、優れて革命的とも言える発展が認められるのは、20世紀後半の、この50年間においてです。看護が専門職業として成り立つための確固とした基盤を看護婦たちが痛切に求めて苦悩したアイデンティティ・クライシスの中で、現実的な改革へ向かうための指針として1948年にEster L. Brownの“NURSING FOR THE FUTURE”（邦訳『これからの看護』）が公刊されてから今日までの50年間は、前半をグランド・セオリー時代、後半を知識の本格的な体系化へと向かう助走の時代と呼ぶことができます。Brownは専門職業看護婦の育成には「高度の教育だけが与え得る、密接に関連する異なった二種類の教育が不可欠である。」¹⁾と述べて、職業上の実務的な訓練と、積極的に健康を守ること、人格の統合、人間行動に対する洞察力と効果的なコミュニケーションの能力、問題を分析し、必要なデータを得て論理的な結論や理論を導く能力や歴史的観点に立って現代社会の機構と役割を

把握する能力、ならびに賢明な市民としての権利と責任に対する理解と自覚とを身につける一般教育との融合の必要を説いています。

1950年代の前半にグランドセオリーのレベルで看護理論の構築が始まったのはこのような事情のもとにおいてです。グランドセオリーの時代、看護の理論家たちの精神は一つの理念、もしくは願望で固く結ばれていたように思われます。それは、看護実践固有の役割と働きが明確にされなければならない、それを最も効果的になし得るのは理論である、それ故、まず理論が構築されなければならない、という共通認識です。こうした共通認識は1970年代前半までに1952年に上梓されたPeplauの“Interpersonal Relation in Nursing”²⁾をはじめとする数多くの、いわゆるグランド・セオリーを生み出してきます。しかしそこには未だ“Paradigm”と呼ぶことができるほど明確な共通の世界観や価値観、あるいは学問上の基本単位といえるものは成立していません。それがようやく成立してくるのは、1970年のMartha E. Rogersの生命過程理論³⁾の登場の前後です。

Martha E. Rogersの生命過程理論が提示したのは、Henderson⁴⁾が明示したような看護固有の働きでもなければ、Wiedenbach⁵⁾やOrlando⁶⁾たちが提示したような、看護に固有の方法、でもない。Rogersが提示したのは人間像です。彼女は看護の世界にそれ以前には全くなかった新しい人間像を、“Unitary man”，すなわち、部分や要素に還元することのできない、部分の総和以上の個であるものとして記述し、看護科学が記述・説明の対象とするべき現象がここにあることを提示します。そしてそれが今私達のParadigmの根幹を形成していると言っても過言ではありません。

実践の本質の記述から、人間の本質の記述へと、看

護科学者たちが共通に分け持つ学問上の基本単位が転換するこの動きこそ、現代看護科学が経験した最初の Paradigm shift であつたのではないかと私は考えているのです。つまり看護学が歩んだこの50年間を彩色する特徴を一言で表現すると、それはParadigmの形成と転換であると言えるのではないかとことです。そして、こうしたダイナミックな動きを通して現代看護学が今日までに成し遂げたこととして、二つ考えられます。一つは、看護実践固有の役割と働きの同定であり、他の一つは、看護科学固有の対象となる現象の同定です。

ひとりの科学哲学者の死のニュースに私がある感慨を覚えたのは、Paradigm という、看護実践にはほとんど無縁とも思える概念を手がかりにして、私達は、現代看護学の成果に一定のまとまりを認め、それに評価を加えることが出来る地点に、今、既に立ち到っているという認識をもっていたからです。

ところで、現代看護学の成立段階においてこの二つの最も大きな仕事を手がけられた二人の独創的な看護理論家たちは、最近相次いで物故されました。Martha E. Rogers 博士は昨年、Virginia Henderson 女史は今年と。二人の訃報は私達のもとから大きな力が失われたことに対する悲しみもさりながら、看護学の中に一つの Paradigm が初めて形成され、形成された Paradigm が初めて転換されていく中から新たな時代が生まれ、且つ展開されていくのを期待のうちに予感させます。

II 変遷する主題：生の共存から、看護関係の生成過程の追求を経て、人間類型の追求へ、そして看護の定義へ

1 「生の共存」と「反省的評価」、そして「制作する行為としての看護」

では、なぜ Martha E. Rogers の生命過程理論の前後に、私は看護学における Paradigm の転換を見るのか？ その理由を、今日ここでは、ちょうどこの時期を跨いで看護の基礎教育をうけ、看護婦として実践に携わり、看護婦として看護の本質を思索する機会に恵まれた幸運を希有のこととして深く心にとめおいてきた一人の看護婦の場合を事例として提供し、考察してみます。

ここに2葉の写真があります。同じ人物が同じ場所

で、30年の歳月を隔てて撮られた写真です。1葉は1966年の冬、他の1葉は1965年の夏。場所は Minnesota 州 Rochester の、Mayo Clinic から数ブロックを下った所にある St. Mary Hospital の正面玄関です。この2葉の写真の間で経過した30年の歳月の中で、看護をめぐる私自身の主題は次のように変化してきています。

「生の共存」と「反省的評価」から、「看護関係の生成過程」モデルの生成を経て、人間類型の追求へ、そして看護の定義へ。

1966年3月から1968年4月まで、私は米国の Minnesota 州 Rochester にある St. Mary 病院で Exchange Nurse Program の研修を受けていました。これらの写真の1葉に写っているのは到着翌日の私です。ここでの2年間は、一口で申しますと、看護とはこのようなものか、これが看護というものであったか、と真の看護実践を目の当りにして驚嘆する日々でした。ここで私は人々が、とりわけナースたちがベッドサイドで、しばしば、“That is why I am here for you.” と患者さんに語りかける様子を幾度か目撃しました。“That is why I am here for you.” というのはどのような日本語の表現に相当するのでしょうか。彼の文化の中での常套句であったのかもしれませんが。しかし、心臓外科のICUや、脳神経外科の手術室で幾度となく耳にしたこの言葉が、帰国後の私の主題となっていくことは確かです。「私はなぜ、今、ここで、他者の看護をするのか？」「私が、今、ここで、他者を看護することが専門職業として成立するのは何によってなのか？」これが私を捉えた最初の問いです。

この問いに対する答えは「生の共存：Concrescence」と「反省的評価」という2つの概念を立てることによって浮かんできました⁷⁾。「なぜ、今、私は、ここで？」と問う時の「なぜ？」の内包は、今、私は、「何のためにここに在るか？」という在ることの目的と、「どのようにして、ここにあるか？」という在ることの様態を示しているはずですし、一方で「なぜ？」の外延は、「何のためにここに在るか？」という実践の根拠となる知の形態と、「どのようにして、ここにあるか？」という実践の形態を示しているに違いないと思われたからです。Virginia Henderson は『看護の基本となるもの』の中で、次のように述べていま

す。

“……看護婦自身が考えている意味ではなく、看護を受ける者それぞれが感じている意味にしたがってそれぞれを健康にし、またそれぞれの人の理解する意味において病気から回復させ、またその人にとってより幸福な死へと歩む過程で何らかのの助けをすること”⁸⁾

ベッドサイドでの看護婦のこのような在りようを、私は「生の共存」と呼んだわけです。看護が生を問題にするとき、それはあくまで、その人にとって生命とは何かということであらねばならないし、看護者自らのかかわりにおいて、その人の生命の意味を問うことに他ならないのではないかと。すると他者を看護するという、人間の歴史の最も古い部分に既にそれが在ったことが認められている、極めてありふれた人間の行為が一つの専門職業として成立するためには、看護活動が看護する者と看護される者との間の相互作用として、看護者自身によって自覚的に認識されなければならないのではないかと。看護者が看護するという自分の働きの対象を史的存在として認識し、対象との間に自分がとり行う看護活動を客観的な根拠に基づいて把握・理解し、再び生産的に働きかける方向において認識する、このような、看護をする者自らが行う主体的・自発的な判断作用を、私は「反省的評価」と名づけました。

看護婦として私が、今、ここに、いる、ということは単に時間・空間を病人と分けもっているということではなく、その人に働きかけながら共にいる、ということに他ならないし、その働きかけの具体的な方向が、Hendersonのいう「生活の援助」ということであるとすれば、生活の援助という具体的行為を通して、意識的連続的に働きかける中で、反省的評価によって、対象との間の相互作用を一刻一刻新たにしながら、その人と共に今、ここ、に在ろうとする時、その具体的行為の必然性と目的性を規定し保証してくれるものが、専門職業人としての能力と資質であるにちがいない、というのがその時点で私が得た結論でした。

この考え方は未熟ながら、今日でいうところの看護過程、ないし看護診断能力の概念に相当するかと思いますが、当時この論文の審査にあられたある高名な哲学者から、哲学の言葉を安易に使っている、という

批判を受けたことを記憶しております。1972年のことです。しかし、「反省的評価」という概念を通して看護を見ることによって、私には、看護することはその行為自体が一つの「製作する行為」という意味をもち始め、その結果、看護婦の存在そのものが一つの技術として自ずから大きな関わりをもっているということが見えてまいりました。

しかし「生の共存」「反省的評価」そして「製作する行為としての看護」という3つの主題は、最初の問いに対する答をではなく、実はもっと重要な問題への入り口を示していたに過ぎませんでした。その時点で、私にとってもっと重要な問題として見えたきたのは、次の3点です。

第一に、「生の共存」という主題が投げかけてきたのは、「今、ここに、在る人は、どのようにして、今、ここに在るのか？」という問いです。今、私の目前にある患者は、なぜ、ここにいるのか？どのような経緯のもとに、患者として、今、ここに、在ることになったのか？という疑問です。

第二は、ひとりひとりの看護婦をして専門職業人たらしめる契機が反省的評価をする能力であるとするならば、それらの人々の集団、あるいはシステム全体としての看護職の働きに専門職業としての裏付けを与えるものは一体何か？という問いです。

第一の問いにヒントを与えてくれたのは、Hendersonが『看護の基本となるもの』の中で述べた“Patient's needs for her help”, 「看護婦からの援助を必要としている患者のニード」という言葉です。その解決のために看護婦の援助を必要としているニードがある。それは一体何であるか？また、そのニードはどのようにして発生してくるのか？

これを説明するために構成されたのが、「看護関係の生成過程モデル」⁹⁾において、現在像と基本像を結びつける看護ニード発生過程であり、これに対して、看護することを「製作する行為」本来の姿、すなわち、素材に働きかけ、素材に形と働きを与え、何かを産みだしていく過程に還元してモデル化したものが、「看護関係の生成過程」の左半分の3角形で描かれる部分です。すると自ずから、看護における技術はここに参与していることが判明してまいりますし、その技術目的こそ、看護実践活動の目的に一致するものであることが明らかにわかってまいります。こうして「看護と

は何か？」という問いが初めて正面に据えられ、正面から問われるようになってくるわけです。

重要と思えた第三の問題は、看護が「製作する行為」であるのならば、それは、一体われわれ看護婦の行為全体、実践活動全体のどの部分で科学と結びつくのか？という問題です。もし看護が科学であらねばならないとしたら、いかなる方法をもって看護科学固有の方法となしえるのか？われわれが製作する行為において働きかける対象である「ひと」は、科学に於いても、そのまま、われわれが探求する現象であると言えるのか？ということです。

この問題には看護の指導者の間で専門職業として成立させるための科学的基盤を求める機運が強く盛り上がっていた当時の空気を反映しております。わが国においてこの時期、『科学的看護論』を著して、看護独自の認識論に基づいた看護実践の方法を提唱された薄井担子氏の時代に先駆けた独創的な仕事で、その後看護教育を通して、看護実践に大きな影響を与えたことは特筆に値することです。しかし、私が採った方法は別の所にありました。それは、もしも看護という専門職業にその裏付けを与えてくれるものが科学的知識の体系であるとするならば、われわれは看護の科学へ至る道を、どこに求めればよいのか？という問を立てることです。これには2つの道が考えられます。術語の体系化へ至る道がどこにあるかを見きわめることと、看護の科学が探求するものが何であるかを探り当てることです。

III 看護の科学へ至る道

通常、科学の通って来た道を振り返ってみれば、そこにはどの領域であれ、必ず、術語の体系化と単位系の確立という仕事がかなされてきたことがわかりますが、1970年代の後半においてさえ、看護においては、未だ‘何を測定するべきなのか’が明らかになってはいませんでした。このことは不可解なことではありません。記述すべき対象、すなわち、看護科学固有の対象となる現象が同定されていない中で、測定の対象が同定され、その方法が確立されることは、順序から言って有り得ないことだからです。従って、看護の科学へ至る道を探るということは、看護の成立する固有の領域が、人間のどこにあるのか、それを探り当てることに他ならないのではないかというのが、私の考え

でした。

これは、われわれは人間、人間というけれども、いたい看護は人間一般に共通する本質をどこに、あるいは何に認めているのか？という疑問に自ずとつながってゆきました。このようにして、ようやく到達した課題が人間像の探求であったわけです。

Nightingale 以来、人間に対して看護が一貫してとり続けてきた態度があります。それは、人間を心と身に分割できないものとして、その全体性において認識するという態度です。この点について、私がいよいよ確信を深めるようになったのは、「看護学における Terminology の明確化に関する研究」¹¹⁻¹⁶⁾を通してでした。この研究はもともと、看護学の体系化への可能性とその方向とを探る目的で、1978年に行った、「わが国における看護研究の動向と文献集録について」¹⁰⁾の分析に端を発しています。第3回四大学看護学研究会のシンポジウムに於いて発表する機会を得ましたが、それが、私が本学会とかかわりをもった最初の年です。

「看護学における Terminology の明確化に関する研究」で私が行ったことは看護理論の概念分析です。根気のいる作業ではありましたが、この作業がもたらしてくれた成果が幾つかあります。それぞれの看護理論の主要概念と概念間の関係の分析は、まず、看護理論の基本構造を明らかにしました。そして看護理論の基本構造が明らかになるにつれて、そこにそれぞれの理論家が暗黙のうちに前提している人間像の輪郭がくっきりと浮かび上がって見えてきました。Nightingale は人間を自然の一部として位置づけ、生命の法則に従って、環境との間に不断のエネルギーの交換を行うものとして認識しています。Peplau は人間を民主的な地域社会の中で発達し成熟していく存在として認識しています。Henderson は人間に対する完璧な信頼感の内に、完全な、全体的な、独立した存在と規定し、他人の手を借りずに人間の基本的諸ニーズを日常生活活動をとおして、生命の避け難い終焉まで尊厳をもって生きる存在と捉え、また、Orlando は人間を行動する有機体と捉えています。Dorothy E. Johnson は人間を環境の中で、許容される範囲の変動を示しながら機能することによって安定性と恒常性を維持していく存在として理解していますし、Wiedenbach は人間というものを、自分の生命を健康で、安楽、かつ能

力を発揮できる状態におくために自然が身体内に設備した諸装置を用いて独力で上手く機能していく存在とみなしており、Travelbee は一回きりの存在であることによって代理不可能な人間を、時間に捉えられ、かつ時間から解き放たれながら自己を変革し、超絶していく者と捉えています。そして Rogers。彼女は統一された全体、解放系、生命の定方向性、パターンとオーガニゼーション、感情と思考力という諸特性のうち人間の本質を記述し、King は社会システムの中で機能する存在として人間を捉え、Roy は生物的・心理的・社会的側面を有する適応機制を統合的に機能させながら、環境に適応していく存在として人間を記述し、Orem は人間を統合的に機能し、セルフ・ケア行動をとる存在として理解しています。

看護の諸理論が記述しているこうした人間像は、“is”，すなわち今、ここに、在る姿ではなく、いわば“ought”，すなわち理念の中に記述された姿ですが、かえってそこに人間本来の普遍的な姿が窺え、深い思索にいざなわれるものです。そしてこうした作業の進行に伴って、私自身の看護の定義とでも言えるものがようやく固まってきました。それが、『看護論』⁷⁾で示しました次のような看護の定義です。

看護実践活動は、人間ひとりひとりが可能なかぎり、自己の最良の人間的能力を発揮して、よく生きることができるよう、その人が健康上の条件を整えるのを手助けすることを目的として、看護婦によって行われる、秩序ある人間の働きである。

さて、このようにして、「生の共存」と「反省的評価」、そして「制作する行為としての看護」に始まり、「看護関係の生成過程」の追求を経て人間類型へと至り、ようやく私自身の看護を定義する段階へと立ち至ると、私の関心は自ずから、人間の全体性と統合性の意味をたずねる作業に向かってゆきました。当時、普通一般には、看護の定義を提示した後で理論家達が一般に目指していたのは、自分の理論を検証するという作業でした。しかし人間の統合性、あるいは全体性とは何であるか、また、その統合性を看護者はどのようにして認識するのか？という問の方に私の関心は強く傾いていました。同じ患者さんに接していても、

看護婦によって観る現象に著しい差が生じることに気づいていたからです。ある看護婦はその人の手助けを必要とするニーズを的確にキャッチするけれども、他の看護婦は同じ現象に何の意味も見いださないからです。

Martha Rogers はこの時期、この問題に対して一つの回答を提示しています¹⁸⁾。彼女は、パターン、つまり人間と環境との間に交換されているエネルギーのパターンという概念を置き、そこに統合された、全体的な存在としての人間について、認識可能な現象を観ようとします。彼女は四次元世界を想定し、時空世界のそれぞれの場で、人間の場と環境の場の産物として新しいパターンが形成されていくと説明しています。看護理論における人間の統合性、全体性の説明に、環境、人間、そして両者の相互作用の場としてのエネルギーの場に加え、時間・空間概念を登場させるのはおそらく Rogers が最初であり、これらは全く重要な鍵を握っているように思えます。しかし、それは彼女のこのような四次元においてではなく、個人の、風土によって規定された「生活」として現れるところの存在の様式、と捉える方が適切なのではないかと私は思いました。人間ひとりひとりが環境との相互限定的な統一作用として行う、日常生活活動の集合としての「生活」は継続性を有しており、「生活の流れ」として現れてきます。人間の統合性と全体性は、環境との相互限定的な統一作用を「生活の流れ」として具体化させてゆくことの中に、既に、自ずから在る。「生活の流れ」というとき、「流れ」は、今、ここで、の無限の生成と消滅の反復継続であると理解できます¹⁹⁾。その様子を、たとえば詩人の三嶋善之氏は、「夕されば」と「秋から」と題した2編の詩の中で次のようにうたっています。

夕されば

かたい靴ピカピカにして
クリーニングに出したシャツ
を着て足はむくんだ首はすりむけた
夕方やっと帰ってきて
ひとりで飲んだ
ひょうたんなまの絵が
ふいに頭の中に映った
どうもわからない

この世界の方法が
ともつぶやいてみた
最後に杯をぐっとあけて
夕されば
と大声を出したが
もちろん
だれにも聞こえなかつたらうから
寝た

秋から

握手の好きな上司が
だんだんこちらにむかってきて
酒宴の最中で逃げられず
握手をした
堅い手ですこし驚いた
俺はコシヒカリをつくっているんだ
稲刈りが終わって
一杯やるんだ
コンパインの月賦もある
なんといつてもじいさんがいるから
五十になつてもしられる
このごろどこへ飲みに行つても
家へ連絡するようになった
じいさんもとしをとつたから
所在だけははっきりとさせておくんだ
若い時外泊して酔つて夜中に帰つてきたら
家の明かりはついてるし
なんだろうと思つてのぞいたら
母親のお通夜だった
みんなの前でしかられて

おい十円貸してくれ
電話だ
おいまだ帰るなよ

(三嶋善之氏のご好意により、許可を得て、詩集『相聞』から転載させていただいた。)

日常生活活動というものを単なる身体の動きの総和と捉える場合には、この考えは成立しません。日常生活活動はそれを介して主体としてのその人の側に取り込まれた客体としての外部環境が主体化され、また逆に主体としてのその人がそれを介して環境化される

(あるいは環境の中に取り込まれる)、すなわち、主体としての身体と客体としての環境という2つの相互に相対立して在るものが総合統一されるための手段としてあるものであり、統合されたものこそが生命活動、すなわち人間ひとりひとりの生活に他ならない。

Martha E. Rogers は人間の全体性、統合性を時間と空間の概念を介して、メタ・セオリーのレベルで捉えたのだと言えます。しかし、現実生きて、今、ここに、在るひとりひとりの人間の全体性、統合性として捉えようとするれば、それはやはりメタ・セオリーのレベルにおいてではなく、「生活の流れ」の中に、しかも風土によって規定された諸個人の「生活の流れ」として現れる現象の中にそれを求めるのが最も適しているのではないかと、そしてここにこそ、人間において看護が成立する領域があり、研究によって記述可能な、看護科学固有の対象となる現象があるのではないかと思えるようになりました。

IV これからの課題：科学と技術の融合

さて、最後に、これからの課題について考えてみるために、始めにおいた問いにもう一度、立ち帰ってみます。看護を「制作する行為」として捉えるならば、看護において技術と科学とは互いにどのような関係のもとにあるのか？ という問題です。この問題は、実は既に Nightingale の命題として提起されてきていますが、今日まで、あまり深く追求されてきたとは言えません。技術を、art として考えれみると、看護における art は「共感の表明、配慮、倫理道徳的かわり、他者への豊かな感性」に根ざしているのに対して、看護の science は、「事実の客観的合理的な探査や、測定に基づいた検証、批判的思考や懐疑、感情論を離れた事実から引き出されてくる結論へのみ向かう忠誠⁹⁾」を志向しています。art の知は看護の技術がその適用過程を通して働かせる個別・固有の認識力であるのに対して、science の知は合理的・普遍的認識力です。このように互いに背反する特徴をもっているが、両者ともその知の目的は理解することの中にあり、看護の art と science は実践の中で合一してきます。看護の art はその適用過程を通して、ひとりのクライアントその人だけに現れる「生活の流れ」を理解し、そこから得られる諸事実をデータとして、やがて看護の science に還元していくからです。私は、看護の

art がその適用過程を通して働かせる個別・固有の認識力と、看護の science がもつ合理的普遍的認識力という、相互に背反する2つの知が、看護実践の中で合一して新しく形成する知の領域を、希望的に看護本来の知の姿として捉え、それを促す看護学固有の方法を“knowing in doing”と呼んでいます²⁾。

看護学においては、ある看護者個人の研究課題は、誠に強い社会的産物であると言えます。他の正常諸科学における科学者の研究主題が一般に「知りたい」という強い個人的好奇心の産物としてあるのに比べ、看護学の研究課題は、社会の要請 (needs) と看護学の発展過程との関数として形成されてくるといってもいいでしょう。看護者が知るべき現象は社会の要請によって健康と関連した時の人間と人間の生活の周辺に限定されるからです。その現象について知りたいという個人の強い欲求は科学に属するものですし、真に知られるべき必要のある現象や、真に知られるべき価値のある現象を知ろうとすることは、art に属するものです。この両者の折り合いをどのようにつけるか、ここにわれわれが看護研究者として立つ時に問われる真のモラルの問題があるはずで、看護研究は健康に対する人間の反応と人間の生活に関して、“is” (事実) を同定するだけでなく、“ought” (理念) を水先案内者としてそれを探求し続けていく、そこに特徴があるといえるでしょう。人間がひとりひとり善く生きることができている状態というものをひとりひとりの「生活の流れ」に沿って観て行くときに、看護科学は有用な科学としてその知識を大きく体系化していけるのではないのでしょうか。

人間が善く生きることがを助けることが看護の働きである、と私は定義してみました。善く生きること、とは人間のどういう状態を指しているか。私たちは自分の身体が全く支障の無い状態にある時、身体を身体として意識しないものです。ここに自分の頭があると自覚するのは、頭痛に襲われている時ですし、ここに自分の胸がある、と自覚するのも胸が苦しく締めつけられている時です。また、自分の身体を目的の場所へ向けて思いのまま移動させることができるのは、下肢がその完璧な支持機能を働かせて自分の身体を支えてくれているからだと再認識するのは、浮腫や倦怠感や疼痛などが歩行を困難にする時です。同じように、私達の毎日の生活は、日常生活活動の、今、ここで、の無

限の生成と消滅の反復継続としての「生活の流れ」として立ち現れるために、万一、それを停滞させたり、逆流させたり、奔流させる事態が生じない限り、自覚的に捉えられるということはないのです。

詩人が「夕されば」や「秋から」の中に歌った生活は、実際、平凡極まりない生活です。しかし、自分の身体を身体として意識しない状態にある時の身体の状態をアリストテレスが快樂、しかも最高度に倫理的な快樂、と呼んでいるように、人間ひとりひとりの「生活の流れ」として立ち現れる平々凡々の日常生活こそ実は完璧な Wellness の状態ではないか。従って、善く生きること、というのは「生活の流れ」の中で自己のより高い水準の統合を目指していくことではないか、と私は考えています。

まとめに代えて

19世紀は看護学が呱呱の声をあげた世紀でありました。20世紀は職業としての看護が専門職業としてのアイデンティティを確立するために、実践の裏付けとなる理論を構築し、研究を開始した世紀でありました。21世紀は、人々が日々を穏やかで健やかな「生活の流れ」の中に善く生きていくための必需道具として看護が重用され、看護治療の方法が多様な目的に合わせて科学的に開発されていく世紀となるに違いありません。そして看護科学が生み出す新しい成果は、くつろいで飲むコーヒーのように、誰でも、それぞれの家庭の居間や寝室で、それを利用できるようなものでありたいものです。

最後に、私の好きな言葉をここで紹介させていただきます。

“Ars sine scientia nihil est. (科学のない技術は何物でもない。)

Scientia sine arte nihil est.” (技術のない科学は何物でもない。)

余談ですがここにお示ししたマークは本学術集会のシンボル・マークです (図1)。これは artistic に、academic に、そして、at home に、の頭文字の3つの“a”をデザインしたものです。この学術集会を、artistic で、academic なものになりたい、しかも at home な雰囲気の中かで運営したいという企画・実行委員の心からの願いがここに込められております。デ



図1 “3つのa”のシンボルマーク

ザインは若手企画委員の手になるものです。私たちはこのシンボル・マークがとても気に入っております。もし皆様も私達と同じお気持ちでご覧いただいたのでしたら、どうか、今日と明日を、3つの“a”でお過ごしただきたいと思ひます。

文 献

1. Brown, E. L.: 小林富美栄訳, これからの看護, 日本看護協会出版会, 1961, P. 140.
2. Peplau, H. E.: *Interpersonal Relation in Nursing*, G. P. Putnam's Sons, New York, 1952.
3. Rogers, M. E.: *An Introduction to the Theoretical Basis of Nursing*, F. A. Davis Co., Philadelphia, 1970.
4. Henderson, V.: *Basic Principles of Nursing*, ICN, Basel, 1960.
5. Wiedenbach, E.: *Clinical Nursing: A Helping Art*, Springer Publishing Co., New York, 1964.
6. Orlando, I. J. *The Dynamic Nurse-Patient Relationship*. G. P. Putnum's sons. New York. 1961.
7. 野島良子: 専門職業人としての看護婦の適性と能力, 看護技術, 18(14); 251-265, 1972.
8. Henderson, V., 湯楨ます, 小玉香津子訳: 看護の基本となるもの, 日本看護協会出版部, 1966, p. 14.
9. 野島良子: 看護論, へるす出版, 1984. pp. 139-158.
10. 野島良子: わが国における看護研究の動向と文献

集録について, 四大学看護学研究会雑誌, 1(1); 42-45, 1978.

11. 野島良子: 看護学における Terminology の明確化に関する研究: 看護における「技術」の概念をとおして: (そのⅠ) 問題の所在と研究方法, 日本看護研究学会雑誌, 5(1); 122-134, 1982.
12. 野島良子: 看護学における Terminology の明確化に関する研究: 看護における「技術」の概念をとおして: (そのⅡ) 看護論の基本構造 (1), 日本看護研究学会雑誌, 5(2); 50-60, 1982.
13. 野島良子: 看護学における Terminology の明確化に関する研究: 看護における「技術」の概念をとおして: (そのⅡ) 看護論の基本構造 (2), 日本看護研究学会雑誌, 5(2); 61-71, 1982.
14. 野島良子: 看護学における Terminology の明確化に関する研究: 看護における「技術」の概念をとおして: (そのⅡ) 看護論の基本構造 (3), 日本看護研究学会雑誌, 5(3); 76-86, 1982.
15. 野島良子: 看護学における Terminology の明確化に関する研究: 看護における「技術」の概念をとおして: (そのⅡ) 看護論の基本構造 (4), 日本看護研究学会雑誌, 6(2); 9-18, 1983.
16. 野島良子: 看護学における Terminology の明確化に関する研究: 看護における「技術」の概念をとおして: (そのⅢ) 「看護関係の生成過程・モデル」の構成と「技術」の定義, 日本看護研究学会雑誌, 6(3); 9-19, 1983.
17. 野島良子. 前掲9. p. 1.
18. Rogers, M. E. 前掲3.
19. 野島良子: 人間の Wholeness と時間・空間, 日本看護研究学会雑誌, 1(1・2合併号); 101-109, 1985.
20. Peplau, H. E.: *The art and science of nursing: Similarities, differences, and relations*. Nur Sci Qua., 1; 8-15, 1988, p. 14.
21. Nojima, Y.: *The structural formula of nursing practice: A bridge to new nursing*. Paper presented at the 19th Quadrennial Congress of the International Congress of Nurses, Seoul, Korea, 1989.